

東京お寺めぐり通信

no.03

2017 Autumn

明治・大正・昭和の東京人

・小澤一蛙 Gallery・



一蛙さんとめぐる東京・第3回

会津・喜多方で「小澤一蛙展」を開催、そして浅草と喜多方

小澤一蛙さんが関東大震災以後集めたカエルの置物や実用品などのコレクションの多くは没後、小金井市の武藏野郷土館（現江戸東京たてもの園）に寄贈されました。福島県喜多方市にある一〇〇年カエル館では、そのコレクションの一部を撮影させていただいた写真と一〇〇年カエル館がご遺族から寄贈いただいたカエルに関する資料で構成した企画展を今年2017年に開催しました。

ところで、会津・喜多方は、今回巡る浅草仏教会、特に浅草寺境内に縁を刻んでいる場所があるので紹介しましょう。

まず新奥山。明治に入つて浅草公園として整備された寺地の本堂西側の一画が新奥山と呼ばれ、そこには浅草寺の近くに居を構えていた元禄時代の歌人、戸田茂睡をはじめ喜劇人や映画弁士など浅草の文化や娯楽を支えた人々を顕彰する諸碑が並びます。その中に所在するのが明治時代、社会事業に尽くした瓜生岩子女史（1829-1897）の銅像。

日本のナイチンゲール、社会福祉の母と目され、明治29年（1896）には女性で初めて藍綬褒章を受章。この女性が喜多方出身で、喜多方市民が誇る偉人です。

第3回 浅草仏教会

CONTENTS

■ 浅草寺境内を巡る

雷門、宝蔵門、仲見世、観音堂、観音堂堂内、影向堂、六角堂と薬師堂、淡島堂、二天門と弁天堂、伝法院と五重塔

■ 浅草寺の歴史を巡って

飛鳥時代、駒形堂と浅草神社、平安時代、江戸時代以前、江戸時代

■ 江戸時代の浅草に遊ぶ

■ 明治以降の浅草

■ 浅草仏教会全域に足を延ばして

花川戸、東上野、松が谷、元浅草、蔵前、他

■ 浅草仏教会としての活動

そして、もう一つ。新奥山を見下ろせる場所に浅草寺の五重塔がありますが、今年2017年はその屋根のふき替え工事が行われました。07年の宝蔵門、10年の本堂に続く屋根の工事で、いずれも耐久性にすぐれメンテナンスもしやすいチタン瓦にふき替えられました。この施工を担当したのが喜多方市のカナメ喜多方工場（本社・宇都宮市）です。会津出身の板金職人9人による約一年かけての工事で、いぶし瓦のような美観も守られました。（福島民友2017年6月14日付より）

江戸と会津のつながりから続く見えない絆を感じます。

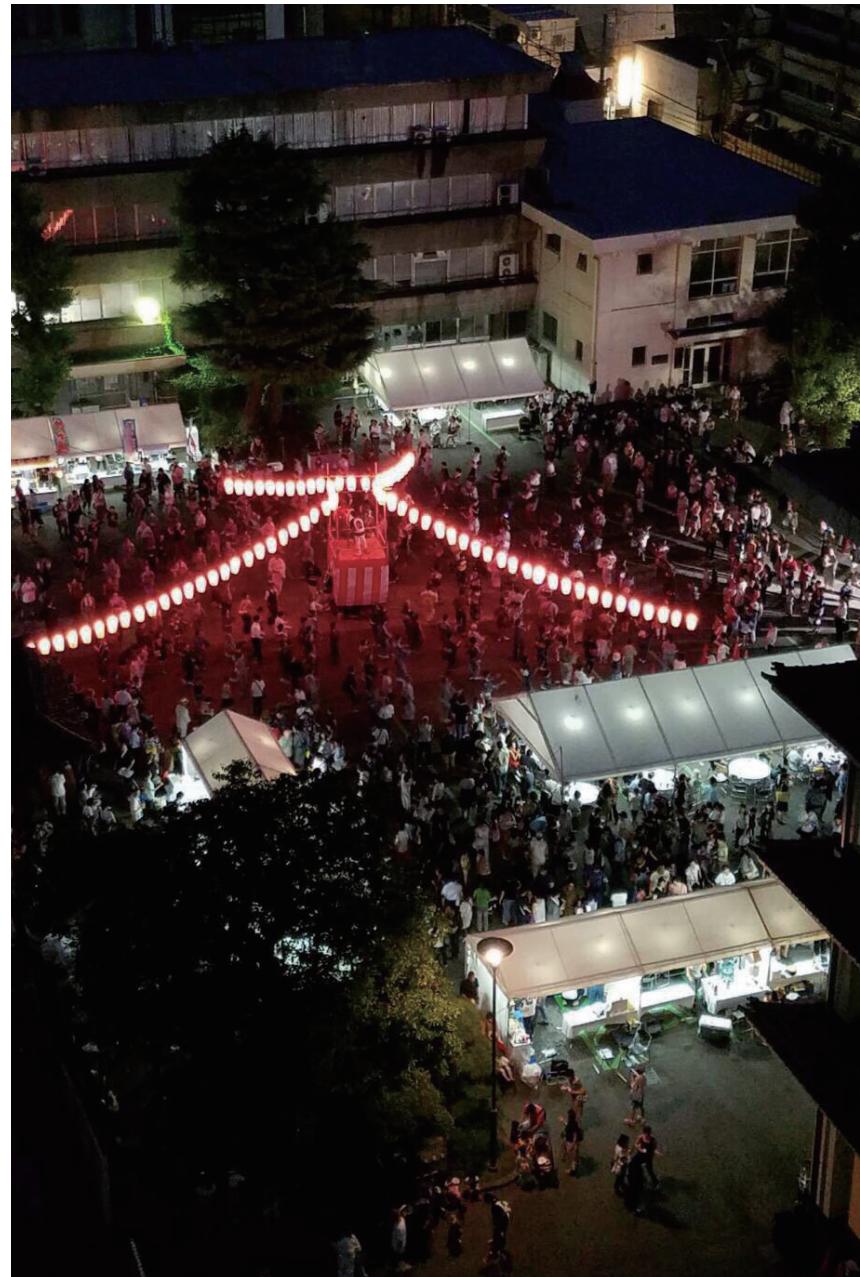
来年戊辰150年の今も浅草に生きているよう

に感じます。

高山ビック



第3回 浅草仏教会



人生の百科事典のような浅草では ダンス、ダンス、今もダンス。

2017年8月 22日、西浅草にある東本願寺境内で東日本大震災七回忌法要が行われ、法要の後に「盆おどり」が催されました。右の写真はその様子です。

今は浴衣を着て参加できる娯楽行事のひとつにも思える盆踊りですが、大きな災害によって失われた命を供養するために行われると、

改めてそれが宗教行事であることに気づかされます。

そして、浅草で踊りといえば、1981年から続いている「浅草サンバカーニバル」。

せんそうじ 浅草寺境内を囲むように馬道通りと雷門通りでサンバのコンテストカーニバルが行われます。

今や北半球最大のサンバカーニバルともいわれ、毎年8月の最終土曜日に50万人の観客を集めます。21世紀の浅草になぜ世界中からサンバ好きが集まるのか、浅草はなぜ今も踊っているのか、

その理由を探ることが浅草仏教会を知ることの手がかりになるかも知れないとしばし旅をしてみることにします。



画像① 仁王像が守る経蔵でもある宝蔵門

一度は参拝したことのある浅草寺も各お堂の意味をかみしめて歩くと……

浅草寺境内を巡る

毎年のテレビ報道で、浅草寺の総門である雷門周辺のサンバカーニバルの賑わいを知らない人はいないのではないか。

【雷門】

「雷門」と書かれた赤い大提灯の左右に、それぞれ高さ2m強ある風神・雷神が安置されています。その雷門のシンボルともいえる大提灯の

奉納は江戸・寛政の時代から行わ

れています。「雷門」の正式名称は

「風雷神門」。長い歴史のある浅草寺の境内のお堂、門、塔は幾度も焼失の憂き目に遭ってきました。雷門も例外ではなく、最後に焼失したのは幕末の慶応元年（1865）。その後95年の長きに亘って再建されることはなく、ようやく目にすることができたのは昭和35年（1960）。現在、私たちが見ている門は、当時、松下電器産業社長の松下幸之助氏の

寄進によるものです。

【宝蔵門】

その雷門から250m先にある宝蔵門（画像①）は、仁王像の姿が見られることでわかる通り、もともとは天慶5年（945）に平公雅（たいらのきんまさ）が創建した仁王門でした。この門もやはり数度、焼失と再建を繰り返したのですが、慶安2年（1649）に徳川家光の寄進により落慶した仁王門は、昭和20年に東京大空襲で焼失するまでなんと300年もの間参拝者を迎えました。浮世絵などにもしばしば描かれた門で、江戸時代は一年のうち元旦や縁日、お彼岸など数日に限つて門の楼上に登ることが許され、庶民が眺望を楽しむことができたといわれます。昭和39年に鉄筋コンクリート造り、本瓦葺きで再建された現在の門は、宝蔵門と称され、伝来の経典や寺宝を収蔵する経蔵（きょうぞう）の役割も果たしています。

【仲見世】

そして、雷門から宝蔵門の間は、昔、「南谷」と呼ばれ、その参道の両脇に12の子院が立ち並んでいます。貞享2年（1685）頃、その門前を掃除する代わりに小屋掛けの店が商いを行えるようになつたのが、ご存じ「仲見世通り」の始まりです。日本で最も古い商店街になりました。観光客で賑わっています。



画像③ ご朱印所でもある影向堂



画像2-2 明治期の写真に見る浅草寺旧本堂



画像2-1 常香爐の煙の向こうに見える観音堂

宝蔵門をくぐれば、浅草寺のご本尊、聖観世音菩薩を祀る本堂、観音堂（画像2-1）が見えます。仲見世通りの人の波にもまれてここに辿り着くと、モクモクと煙る常香爐に手をかざす参拝者の姿にここが信仰の場であることが伝わります。この本堂もまた、失火や落雷、延焼による焼失を重ねた歴史があり、その数は記録によれば20回近いともいわれます。現在の本堂は、国宝に指定された旧本堂（画像2-2）が東京大空襲で焼失した後、昭和33年に再建されました。旧本堂は、仁王門

同様、慶安2年に願主である徳川家光によって建てられたお堂で、江戸、明治、大正、昭和に亘って観音信仰の中心を担ってきました。明治40年（1907）、国宝に指定。現在の本堂はその姿をもとに鉄筋コンクリートで造られています。

【観音堂堂内】

その堂内に足を踏み入れてみましょう。内陣と外陣に分けられた堂内では、天井まで約10mある大空間の外陣で、三面の大きな天井絵を見る事ができます。中央が川端龍子（1885-1966）の「龍之図」で、左右が堂本印象（1891-1975）の「天人之図」と「散華之図」。

内陣にはご本尊を奉安する御宮殿があり、その中にはお厨子に納められた「秘仏」のご本尊聖観世音菩薩やご本尊のお身代わりである「御前立ご本尊」、また、徳川家や皇族の護持仏だつた観音様が安置されています。御宮殿のまわりには、左右に梵天と帝釈天の立像、背後の裏堂には観世音菩薩が安置され、内陣には、また、ご本尊の脇侍として不動明王と愛染明王が祀られています。梵天と帝釈天の立像、背後の裏堂には観世音菩薩が安置され、内陣には、また、ご本尊の脇侍として不動明王と愛染明王が祀られています。御宮殿のまわりには、左右に

【影向堂】

浅草寺境内をさらに探索すれば、本堂の西の境域にある影向堂（画像③）は、「影向衆」とよばれる仏様を千本ごとの守り本尊として八体祀っています。ここは朱印所でもあり、浅草寺の参拝証としてご本尊の観世音菩薩と影向堂外陣に祀っている大黒天のご朱印をお授けいただくことができます。

（画像④）は、元禄年間、紀伊国のかみを祭神とする加太淡嶋神社から淡島明神を勧請して建てられた、女性の守り神を祀るお堂です。毎年2月8日はここで針供養が行われます。また、本堂が東京大空襲で焼失した際、当時本堂の前にあつた淡島堂がご本尊を御守する仮本堂になりました。

（画像⑤）は、元禄年間、紀伊国のかみを祭神とする加太淡嶋神社から淡島明神を勧請して建てられた、女性の守り神を祀るお堂です。毎年2月8日はここで針供養が行われます。また、本堂が東京大空襲で焼失した際、当時本堂の前にあつた淡島堂がご本尊を御守する仮本堂になりました。

（画像⑥）は、元禄年間、紀伊国のかみを祭神とする加太淡嶋神社から淡島明神を勧請して建てられた、女性の守り神を祀るお堂です。毎年2月8日はここで針供養が行われます。また、本堂が東京大空襲で焼失した際、当時本堂の前にあつた淡島堂がご本尊を御守する仮本堂になりました。

【六角堂と薬師堂】

影向堂と同じ境域にある六角堂（画像④）は室町時代に建立された堂宇で、都内最古の木造建造物です。ここに安置されている日限地蔵尊は、何日と日数を決めて祈るとその願いが叶うといわれます。影向堂の南には、やはり江戸時代以前の古い建物である薬師堂があります。

【淡島堂】

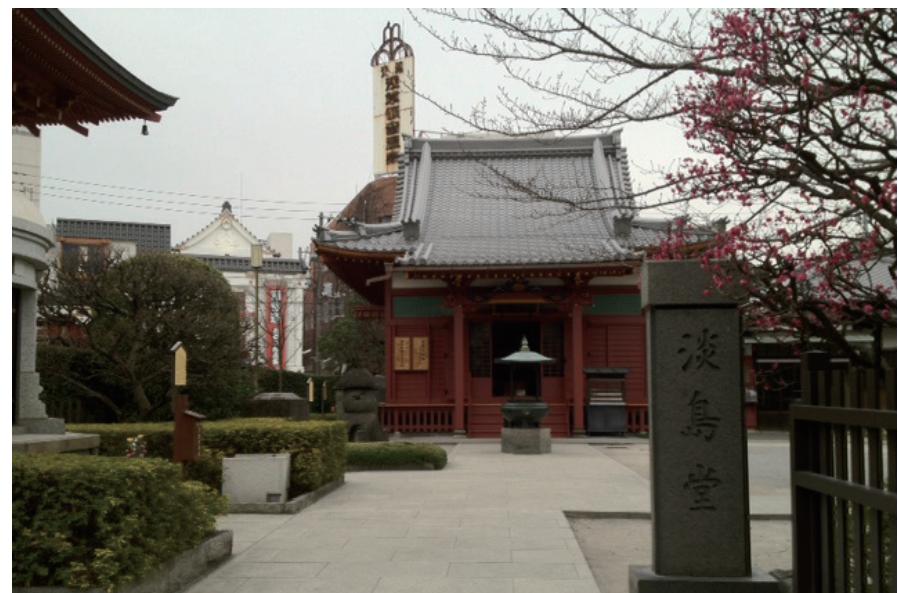
【二天門と弁天堂】

さらに、本堂前を東の方に歩けば、サンバカーニバルのスタート地点近くに抜けられる朱塗りの門が二天門。慶安2年に創建された貴重な古建築として国の重要文化財に指定されています。そして本堂の南東にある弁天山には弁財天を祀る弁天堂があり、松尾芭蕉によつて「花の雲鐘は上野か 浅草か」と詠まれた「時の鐘」があり、江戸市中に時を告げました。その鐘は、現在も毎朝6時に撞かれます。

の向こうには安土桃山時代から江戸時代にかけての茶人、小堀遠州による池泉回遊式庭園があり、不定期で特別公開されます。また、その境域にある五重塔は、江戸四塔のひとつとして徳川家光が再建した塔は東京大空襲で焼失。現在の塔は昭和48年に再建されました。



画像④ 都内最古の木造建築の六角堂



画像⑤ 女性の守り神を祀る淡島堂



画像⑥ 写真左手に池泉回遊式庭園もみごとな伝法院

浅草が聖と俗のパワーに満ちているその縁起と歴史

浅草寺の歴史を巡って

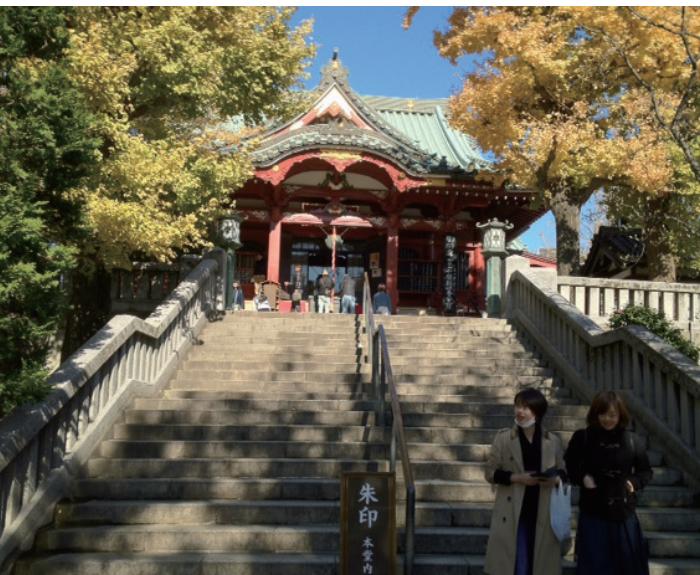
【飛鳥時代】

「浅草寺の縁起」は、飛鳥時代、628年に檜前浜成・竹成（ひのくまはまなり・たけなり）の兄弟が宮戸川（隅田川）で漁をしているときに、一駄の観音様のご尊像を引き上げたことに始まります。これが聖観世音菩薩と知った郷司の土師中知

（はじのなかとも）は、深く歸依し自宅を寺にして礼拝供養に生涯を捧げたといわれます。そして大化元年（645）、勝海上人がこの地に観音堂を建立し、夢告によりご本尊を秘仏と定められたと伝えられています。

【駒形堂と浅草神社】

このような浅草寺発祥の靈地と



画像③-1 待乳山聖天(階段を上がり本堂へ)



画像③-2 本堂の墓脛にも大根の意匠が施されている。

して隅田川にかかる駒形橋の傍らに建つお堂が駒形堂で、天慶5年（942）に平公雅が建立。現在のお堂は平成15年に再建されたものです。また、縁起に関わった三人を神

として祀っているのが浅草神社（三社権現社）。今は毎年5月に行われている三社祭も、その縁起に基づき正和元年（1312）に船祭として始まったといわれています。

【平安時代】

平安時代に入ると、比叡山第三世天台宗座主慈覚大師円仁（じかくたいしん）が来山し、中興開山となり、浅草は宗教的な聖地に。そしてすでに本稿でその名前が出ていた武将の平公雅が七堂伽藍を建立して靈場としての基本がつくられました。

浅草寺は元禄年間（1688-1704）の觀音堂大修復以後、公儀の普請に頼れなくなります。その後の営繕は庶民の淨財によるものとなり、浅草と庶民の結びつきが深まりました。そして歌舞伎や浮世絵などをはじめ江戸時代ならではの芸術・文化がここ浅草に花開きます。

江戸時代の浅草に遊ぶ

浅草寺の寺宝のなかには、二百余枚現存する奉納絵馬があり、谷文晁、鈴木基一、歌川国芳など、最近の展覧会でも人気の高い江戸の絵師たちの作も見られます。

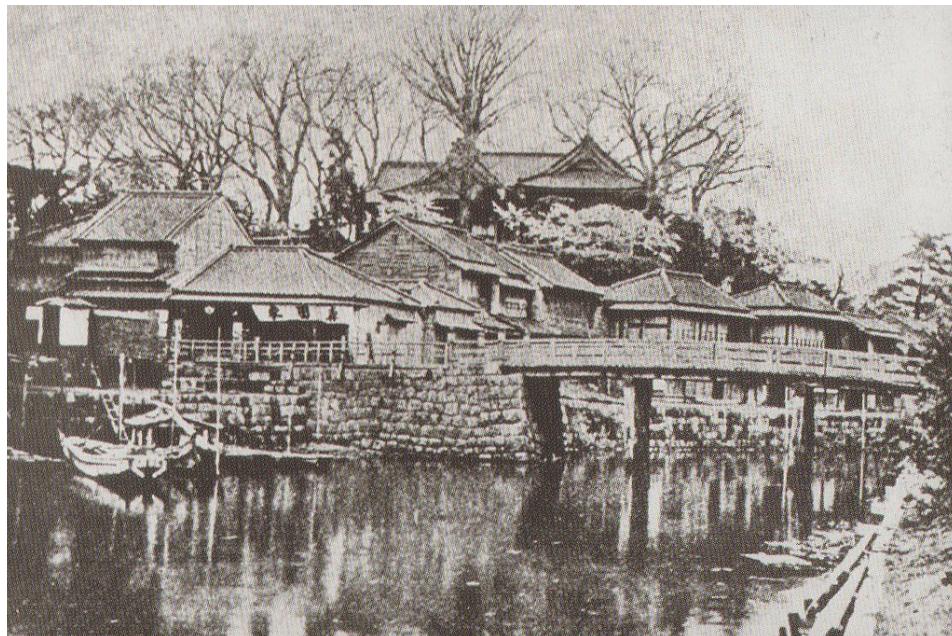
浅草は本サイト第2回で紹介した本所同様、隅田川流域に栄えた地域ですが、浅草寺の北東、隅田川西岸にある待乳山聖天（画像③）は浅草寺の子院のひとつで正式には本龍院といいます。待乳山は江戸に広がる

【江戸時代以前】

江戸時代以前の浅草寺は、武将との関わりが深く、鎌倉時代には源頼朝、室町時代には足利一族や小田原城主北条氏綱が信仰しています。そして徳川家康は慈眼大師天海の進言により浅草寺を祈願所に定めると、関ヶ原の戦いの勝利によりその靈験はいよいよ天下に響きわたりました。

【江戸時代】

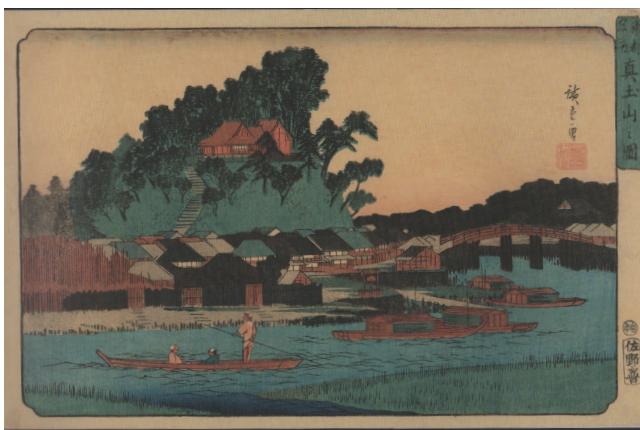
江戸時代に入り、浅草は明暦の大火（1657年3月2日）後移転してきた寺院も多くあるなか、それまで日本橋にあつた吉原が新吉原として浅草につくられ盛り場として独特の雰囲気を醸します。



画像⑩ 待乳山と今戸橋、山谷堀の明治期の写真(『浮世絵画集 名刹 待乳山聖天と周辺地域』より)



画像⑪ 歌川広重が待乳山を描いた作品

(右)「東都名所 真土山之図」文政～天保年間(1818～1844) 本龍院所蔵
(左)「名所江戸百景 真乳山山谷堀夜景」 本龍院所蔵

エッセイに「待乳山聖天は私の心のふるさとのようなものだ」と書いた作家池波正太郎。その忍びものにあやかってか“甲賀忍者”的集まりも。



画像⑫ 待乳山聖天境内。着物姿の参拝者も。

平野の中で見晴らしのいい小高い丘。江戸の文人墨客に愛され、多くの絵画や歌の題材にもなった場所です。本龍院では今も折々、寺宝を中心浮世絵展を開催することがあります。また、三種供物の一つである大根をお供えすることで運気が呼びこめると、境内は参拝者で賑わいます(画像⑨)。毎年1月7日は心身の健康を願う大根まつりも。

そのすぐ北に位置する今戸神社周辺には、寺院が今戸地名で10ヶ寺、橋場地名では、浅草七福神の布袋尊を祀る橋場不動など5ヶ寺あり、江戸初期に箕輪(三ノ輪)から今戸まで造られた水路「山谷堀」(現山谷堀公園)はここから吉原へ通う舟が行き来していました(画像⑩)。

隅田川沿いのこの辺りから両国にかけては数多くの料理茶屋が立ち並んでいました。

待乳山の絵も多く描いた歌川広重の作品(画像⑪)には、天保期の有名な料理茶屋を描いたシリーズ「江戸高名会亭尽」があり、橋場の「柳屋」の絵もあります。このような料理茶屋では書画会、狂歌会、句会、稽古おさらい会、千社札などの交換会、生花会などさまざまな文化活動が行われていたという記録があります(平成27年度東京都江戸東京博物館都市歴史研究室シンポジウム「墨田川流域を考える」より)。

飲食をしながら書画を見て買つて楽しむ書画会の大規模なものは、今戸や橋場よりも本所地域の両国橋に近い柳橋にある料理茶屋で行われることが多かつたのですが、天保7年

に曲亭馬琴が柳橋万八楼で主催した書画会の出席者を見ると、儒者、詩師、戯作者、落語家などが集まるなかに、谷文晁、渡辺華山、歌川国芳、歌川広重などの名前があります。浅草寺などの寺宝に作品を遺している隅田川流域ではいかに江戸文化のスターたちが活躍していたかがわかります。

飛鳥時代に觀音様が示現して神聖なる場所になつた浅草が、長い歳月を経て江戸時代には町人を中心とする庶民の力によって人間味あふれる文化を育みました。いわば聖と俗があざなえる縄のごとく絡み合つて発展した場所である浅草は、江戸時代が終わつた後も他に類を見ない魅力を保ち続けているといえるでしょう。

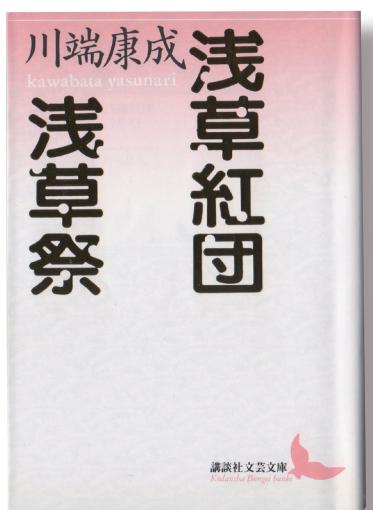
明治以降の浅草

浅草は明治に入つて奥山にあつた盛り場がそれまで田圃だった六区に移りました。本サイト第2回のトップ面で紹介した淡島寒月の著書『梵雲庵雑話』にこんなことが書かれています。

明治のはじめに浅草寺内に国内外の奇人変人が集まつて見世物のようなことを繰り広げます。その中心的な役割を担つた人が、寒月の父、淡島椿岳だった、と。淡島家は浅草寺と関わりが深く、当時大きな時代変化で秩序を失つていた浅草寺で、椿岳は仁王門（現在の宝蔵門）の二階に住み、淡島堂の堂守をしていたこ

とで草寺の名前も見られ、浅草も含めた隅田川流域ではいかに江戸文化のスターたちが活躍していたかがわかります。

人、書家、絵師、浮世絵師、狂歌師、戯作者、落語家などが集まるなかに、谷文晁、渡辺華山、歌川国芳、歌川広重などの名前があります。浅草寺などの寺宝に作品を遺している絵師の名前も見られ、浅草も含めた隅田川流域ではいかに江戸文化のスターたちが活躍していたかがわかります。



画像⑫ 当時浅草ブームを起こした川端康成の作品

ともあつたと記されています。

大正時代の浅草公園六区は、大正12年（1923）に関東大震災が起ころまでオペラを大衆化した浅草オペラが一世を風靡します。そして、昭和4年（1929）に浅草水族館2階で旗揚げした軽演劇集団が、工ノケンこと榎本健一が率いることにノ・フォーリーとの関わりから作家川端康成が生み出した作品に『浅草紅団』（画像⑫）があります。

昭和のはじめ頃の浅草周辺の雰囲気は、この小説の中にまるで今もその時代の浅草がうごめいているかのようになります。『浅草紅団』

が発表されたのは昭和5年。この作品で川端は大正12年の関東大震災から昭和4年（1929）の世界恐慌を背景に変わりつつある浅草をドキュメンタリー的な視線で追いかけながらそこで繰り広げられる人間模様をフィクションにしています。

大坂で生まれ育つた川端は進学を機に上京し、最初は浅草の「藏前の

従兄の家に居候し」「大学の前半は浅草の鳥越に下宿していた」（『浅草紅団』について）。大学生であつた若い時代によく通つた浅草公園をはじめとする浅草が「田舎者の私には異常な魅力であつた」と書いています。

しかし、結局、後にノーベル文学賞を受賞することになるこの作家をして、浅草を掌中にすることは難しかつたようで、この作品を失敗作とみなしてその続編『浅草祭』を書きました。近づいたと思つてもなぜか踏み込めない浅草という地。この二つの小説は、浅草寺内の堂宇や周辺の施設が第一級の作家の手によってあり得ない観光ガイドとしても読むことができます。

当時、川端を酔わせていたジャズダンスにアクロバチックタンゴにコミックソング。川端も愛したそんな娯楽の一大中心地だった浅草が昭和30～40年代には見るかげもなくなつてしまつた。時を経て1981年から始まつた浅草のサンバカーニバルは、そのことを案じた当時の台東区長と浅草喜劇出身の俳優伴淳三郎によつて発案されたという逸話もあります。

そして、浅草は今もダンス、ダンス、そしてダンス。踊ることが信仰につながつてゐるエネルギー・シューな場所といえるでしよう。



大都市に息づいている 仏様と出会える浅草

浅草仏教会全域に 足を延ばして

浅草仏教会は浅草寺をはじめ182ヶ寺の寺院から成っています。浅草寺の寺域を巡ったあとは仏教会全体に少し足を延ばしてみましょう。

【花川戸】

仲見世から東に歩くと、ほどなく歌舞伎十八番「助六」にゆかりのある地、花川戸があり、花川戸公園には「助六碑」を見ることができます。川端の『浅草紅団』の中でも、当時、浅草で唯一エレベーターのあるビルの中の「地下鉄食堂」の隠語として登場した地名。ここには、教善院と九品寺の2ヶ寺があり、九品寺には、昔、平安朝の学者小野篁の作と伝

画像⑬
花川戸幼稚園の一角
で園児を見守る九品
寺の沓履地蔵尊

えられる沓履地蔵尊が安置されました。しかし、関東大震災で焼失。現在の石仏（画像⑬）は平成三年にほぼ等身大で復元したものです。

【東上野】

浅草寺から南西の方角に出向くと、本サイト第1回で紹介した下谷地域に近づく辺りが東上野。この地名にある寺院は23ヶ寺で、歓楽地の喧騒から離れ、散策していると江戸から明治にかけて活躍した絵師や文人、発明家など歴史上の著名人の墓所に出会うことがあります。清洲橋通りと浅草通りが交わる交差点付近にある西照寺には明治3年に人力車の製造販売を初めて行つた、鈴木徳次郎の墓があります。21世紀の今も浅草に行けば威勢よく人力車が走つていて、その偉業に、また安全を願つて手を合わせたくなります。

明暦の大火でこの地に移転した源空寺には、天文学者で全国を測量し『大日本沿海輿地全図』作成に取り組んだ伊能忠敬（1745-1818）、その師である高橋至時、その子で忠敬の死後全図を完成させた高橋景保の墓があります。江戸の人気絵師の谷文晁、歌舞伎や講談でおなじみの幡隨院長兵、衛もここに眠っています。

また、東上野の報恩寺は、江戸時代は坂東報恩寺と称して13ヶ寺を有する大きな寺院でした。開基の性信上人へのご恩で、毎年1月12日に鯉料理規式が執り行われます。江戸歳時記として有名で、俎開きとも呼ばれます。

【松が谷】

東上野の北に位置する松が谷には



画像14-2 門のすぐ横にいるかっぱのぎーちゃん



画像14-1 通称かっぱ寺の曹源寺

20ヶ寺あります。隅田川流域で発展した浅草は水と関わりが深いと見て、松が谷ではたとえば河童や蛙と縁のあるお寺を訪ねてみましょう。カツバ寺で知られるのは、曹源寺。合羽橋商店街の名前の由来にもなった合羽屋喜八は水はけの悪かった当地で私財を投じて開削工事をおこなつた。その工事を隅田川に棟んでいた河童が手伝つたという逸話によつて喜八の眠る菩提寺が「かっぱ寺」(画像14)と呼ばれるよう。商売繁盛のご利益があるともいわれる「河童大明神」が祀られています。そして「墓大明神」(画像15)があるのは本覚寺。同寺とカエルとの縁は、天保の頃、ある檀家が家業繁栄を願つて建てた「蛙墓塚」に始まります。現在の墓堂を建てた人が歌舞をよくしたことから、特に芸事をする人に広く信仰され、堂内には大小



画像15-2 芸能関係者や最近はカエル好きの参拝者も多い墓大明神



画像15-3 墓大明神で知られる本覚寺



画像15-1 たくさんのカエルの置物が奉納されている墓大明神

【元浅草】
数多くの墓の置物が奉納されています。さて、江戸で水といえば玉川用水。その開削工事を行つた玉川兄弟の墓が聖徳寺にあります。

松が谷の南、東上野の東側に隣接する辺りは元浅草で、この区域には28ヶ寺の寺院が所在します。美術に関心のある方なら日本が世界に誇る江戸の浮世絵師のお墓参りができます。たとえば葛飾北斎。2017年の今年はイギリスの大英博物館で北斎展が行われましたが、「富嶽三十六景」「北斎漫画」などの作品で今世紀に入つて世界的な人気が益々高まる北斎の墓所が誓教寺(画像16)にあります。北斎という名前



画像13 西浅草にある浄土真宗東本願寺派本山



画像14-2 誓教寺境内には北斎翁の石像も。



画像14-1 葛飾北斎の墓。北斎を示す「画狂老人」の雅号が読める。



画像14-3 北斎寺で知られる誓教寺

後の雅号が「画狂老人」。墓にはその名前と辞世の句が刻まれています。毎年命日の4月18日には「北斎忌」として法話会が行われ、北斎の作品が鑑賞できます(画像17)。また、最後の木版浮世絵師といわれる小林清親(1847-1915)の墓があるのは龍福院。清親は幕末から明治の転換期にイギリスのワーゲマンから洋画を、今も人気の高い河鍋暁斎と柴田是真から日本画を習いました。因みに是真の墓は今戸の称福寺に所在。浅草仏教会で絵師のお墓参りを試みれば、江戸に花開いた美術のネットワークに時を超えて連なるかもしれません。

【藏前】

元浅草の南東、隅田川にかかる厩橋周辺が元国技館のあつたことで知られる藏前。地名は幕府の御米蔵があつたことに由来する、江戸時代、政治経済的に重要な場所でした。こ

今回の冒頭に紹介した盆おどりが開催された東本願寺(画像18)があるのは西浅草。同寺は明暦の大火後に、幕府から堂宇を築地につくるか、浅草にするか選ぶようお達しを受けてこの地での布教を始めます。そもそもは親鸞聖人の教えを受け継ぎ、現在、浄土真宗東本願寺派本山となつた同寺は、長い歴史の中で時の権力との戦いも多く、厳しい時代を何度も乗り越えて今に至つていま

浅草仏教会としての活動

この寺院が7ヶ寺ありますが、大きな権の木を通して縁のあつた秋葉権現に守られている寺院が、その名も権寺。墓所には、洋画家の安井曾太郎、国学者の石川雅望、評論家の長谷川如是閑の生家、その他、場所柄歌舞伎役者や横綱などの墓碑銘が見られます。淨念寺には「御府内風土記」「御府内備考」の編纂者、三島正行の墓があります。また、江戸淨土宗4ヶ寺のひとつである西福寺は、徳川家康の側室のお竹の方(武田信玄の娘)の菩提寺です。

浅草仏教会は、また、鳥越に3ヶ寺、寿に17ヶ寺、千束に1ヶ寺、清川に9ヶ寺、橋場と東浅草にそれぞれ5ヶ寺あります。多くがお檀家さんとの関わりで成り立つていて、浅草寺のように一般に開かれているわけではありませんが、台東区が掲示している案内板などを手がかりに浅草地区全体を巡れば、歴史上なじみのある偉人のお墓参りをしたり、各お寺が開催している行事や教室に参加したりすることもできます。



19-2 浅草仏教会の僧侶による成道会の読経



画像19-1 2016年12月8日に行われた国際的な仏教者ケネス・タナカ氏による講演

す。

西浅草には浄土真宗東本願寺派と

真宗大谷派の27ヶ寺の寺院がありま

す。その一つ、真宗大谷派運行寺は

東寺（なつめじ）とも呼ばれ、現住

職菅原侍氏の祖父恵慶氏と中国山西

省玄中寺の棗の実をつなぐ、戦時下

の悲劇と僧侶による命がけの社会活

動、そして日中友好の物語を今に伝

える寺院です。

現住職は現在の浅草仏教会の理事長を務めています。他の仏教会同様、浅草地区の寺院が宗派を問わず加盟する同仏教会では、全体で執り行う年間行事として花まつり、戦没者法要、災害が起きたときの浅草寺での

がありました（画像19）。

日本では日常に根付いているがゆえに意識することが少なくなつた仏教が、アメリカでは著名人も含めてマインドフルネス瞑想のブームなどとともに関心が高まつて現状を、日本との違いやむしろ今後の日本の仏教に与える影響など認識を新たにさせられる内容でした。

司会を務めた菅原理事長は「お釈迦様も最初から釈迦として生れてきたわけではなく、悟りによってその道を行くことを決められた。それは私たち一人ひとりにも当てはまる」とだと思います。成道会ではさまざまなお話を聞くことで、忙しい日常の中で自分を見つめるきっかけにしてほしい」とその意義を語ります。

関東において京都に比肩できるほど最も日本的でありながら、サンバを踊れば地球の裏側と直結しているようなグローバルさも感じられる浅草。浅草仏教会は、私たちが生きていたとき、ここに足を踏み入れ海外の人も含めさまざまな人の姿を目にするだけで、長い時間の蓄積の中から誰かが何かを教えてくれる、そんな気がする場所にある仏教会です。

街頭募金、そしてお釈迦様が悟りを開いたとされる12月8日に行われる成道会があります。

他の仏教会でも成道会では講演会などが催されますが、2016年12月8日に藏前の権寺で行われた浅草

仏教会の講演会では、日系アメリカ人三世で、日米で教育・研究に取り組みながら国際的な仏教者として活躍しているケネス・タナカ氏のお話